



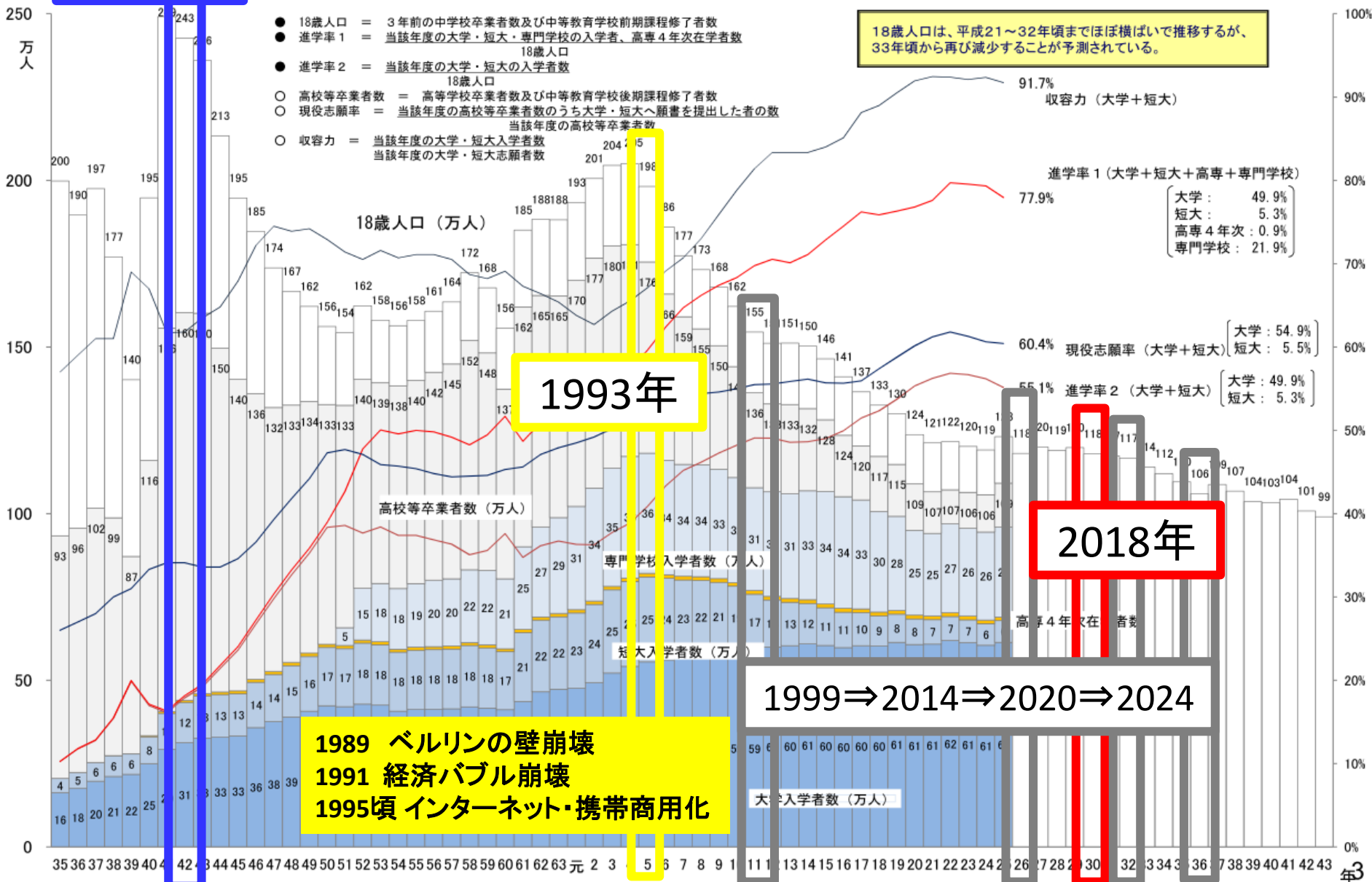
JSPS

高等教育の現状と課題 — 高大接続を中心に —

安西祐一郎
日本学術振興会

1967年

18歳人口と高等教育機関への進学率等の推移



- 18歳人口 = 3年前の中学校卒業生数及び中等教育学校前期課程修了者数
- 進学率 1 = 当該年度の大学・短大・専門学校の入学者、高専4年次在学者数 / 18歳人口
- 進学率 2 = 当該年度の大学・短大の入学者数 / 18歳人口
- 高校等卒業生数 = 高等学校卒業生数及び中等教育学校後期課程修了者数
- 現役志願率 = 当該年度の高校等卒業生数のうち大学・短大へ願書を提出した者の数 / 当該年度の高校等卒業生数
- 収容力 = 当該年度の大学・短大入学者数 / 当該年度の大学・短大志願者数

18歳人口は、平成21～32年頃までほぼ横ばいで推移するが、33年頃から再び減少することが予測されている。

大学：49.9%
短大：5.3%
高専4年次：0.9%
専門学校：21.9%

大学：54.9%
短大：5.5%

大学：49.9%
短大：5.3%

1989 ベルリンの壁崩壊
1991 経済バブル崩壊
1995頃 インターネット・携帯商用化

出典：文部科学省「学校基本調査」(平成25年度は速報値)、平成38年～43年度については国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(出生中位・死亡中位)」を基に作成

数字は万人(概算)

平成23年度学校基本調査及び大学入学者選抜に関する文科省調査より推計

中学校

小学校

幼稚園

幼児教育

家庭

地域

普通高校

専門高校

総合高校

専修学校
高等課程

高等専門学校

就職等

高等学校教育・専修学校教育・高等専門学校教育

高等学校学習指導要領／指導要録

高等学校基礎学力テスト

普通教育
職業教育

生徒個人による活動経歴

高等学校調査書

一般入試を経て大学進学(33)

一般入試以外を経て大学進学(27)

特別な支援を必要とする生徒、発達・学習障害を抱えた生徒

不登校や高校中退等を経験した生徒(5)

専門学校等に進学(25)

就職等(20)

社会人(雇用・処遇)

大学入学希望者学力評価テスト

個別大学アドミッション・ポリシー／多角的評価入学者選抜

個別大学のカリキュラム・ポリシー

個別大学のディプロマ・ポリシー

個別大学入学者選抜実施要項
認証・評価
統合3ポリシー評価

就職・大学院等

社会人(雇用・処遇)

子どもたちの直面する社会・教育問題

- 少子高齢化の急速な進行と生産年齢人口の減少
- 労働市場の構造変化
- 雇用の混乱－正規・非正規雇用の分裂
- 企業の採用基準
- 地域創生への課題
- 社会保障費の急増と国家財政の逼迫
- 国際的求心力の喪失 (Japan passing)
- 他国・他地域との国際関係
- 就学前・高大教育費負担と少ない公財政支出
- 大学教育のユニバーサル化
- 高校教育の現実、大学教育の現実
- 高校生の不安感・目標喪失
- 不登校、児童虐待の急増
- 家庭の崩壊、コミュニティの消失
- 格差 (所得格差、学歴格差、知識格差、家庭格差・・・)

三 この文章を読んで「かるた」について分かったことの中から、興味をもったことについてさらに調べることにしました。次のア、イ、ウについて、それぞれの指示にしたがって書きなさい。

なお、読み返して文章を直したいときは、二本線で消したり行間に書き加えたりしてもかまいません。

ア この文章を読んで、「かるた」について分かったことを一つ書きなさい。

イアについて、さらに調べたいことを一つ書きなさい。

ウ イを調べる手段を、次の①から③までの中から一つ選び（どの調べる手段を選んでかまいません）、その手段を用いて「どのようにして情報を集めるのか」を二十字以上、五十字以内で書きなさい。

なお、③「その他」を選んだ場合は、あなたの考える調べる手段を解答用紙の（ ）に書きなさい。

- 〈調べる手段〉
- ① 学校図書館
 - ② インターネット
 - ③ その他

※ 左の枠は、下書きに使ってもかまいません。解答は必ず解答用紙に書きなさい。

イ

ア

ウ
〈調べる手段〉

① ② ③

（ ）

※ ③を選んだ場合は、左に調べる手段を書きなさい。

〈どのようにして情報を集めるのか〉

三 今村さんたちは、「4 まとめ」の C について、「編集会議での町田さんと山下さん

の意見」を受け、書き出しの文に続く内容を考えました。おどの条件に合わせて書きましよう。

の意見」を受け、書き出しの文に続く内容を考えました。おどの条件に合わせて書きましよう。

【編集会議での町田さんと山下さんの意見】

町田さん

「4 まとめ」には、題名「打ち上げ花火の伝統」に合う内容を書いたほうがいいと思うわ。書き出しの文（「打ち上げ花火は、…伝統といえます。」）は、「歴史」に注目し、「1 打ち上げ花火の歴史」の内容をまとめているわね。

山下さん

それに続く内容は、「現在」の打ち上げ花火に注目し、「2 打ち上げ花火の種類」と「3 花火師の小野さんの声」の「イ つくり出す伝統」の中に書かれている。現在における打ち上げ花火の形や色、打ち上げるときのかふうを取り上げて書いたほうがいいね。そして、最後に考えたことをまとめて書いてらどうか。

打ち上げ花火は、およそ400年もの歴史をもった、日本のすばらしい伝統といえます。

80字

100字

※上の原稿用紙は下書き用なので、使っても使わなくてもかまいません。解答は、解答用紙に書きましよう。

※◆の印から書きましよう。とちゅうで行を変えないで、続けて書きましよう。

平成25年全国学力・
学習状況調査
(小6国語B p.11)より

平成25年全国学力・学習状況調査
(中3国語B p.3-4)より

http://www.nier.go.jp/13chousa/pdf/13mondai_chuu_kokugo_b.pdf

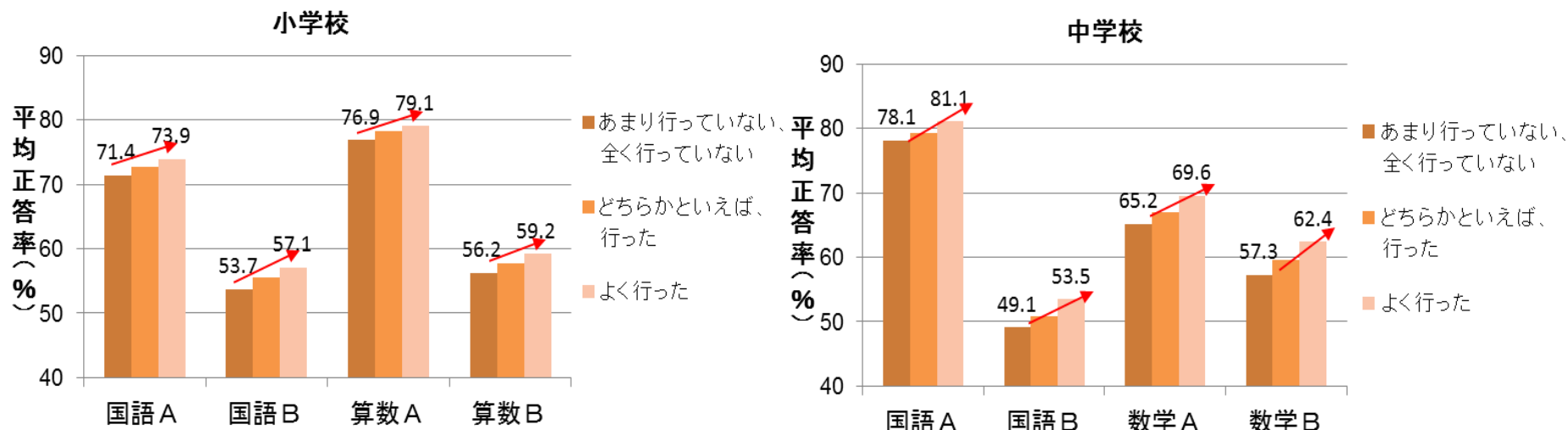
©Yuichiro Anzai

全国学力・学習状況調査結果より

＜平成26年度全国学力・学習状況調査＞ 学校における指導等と学力等との関係

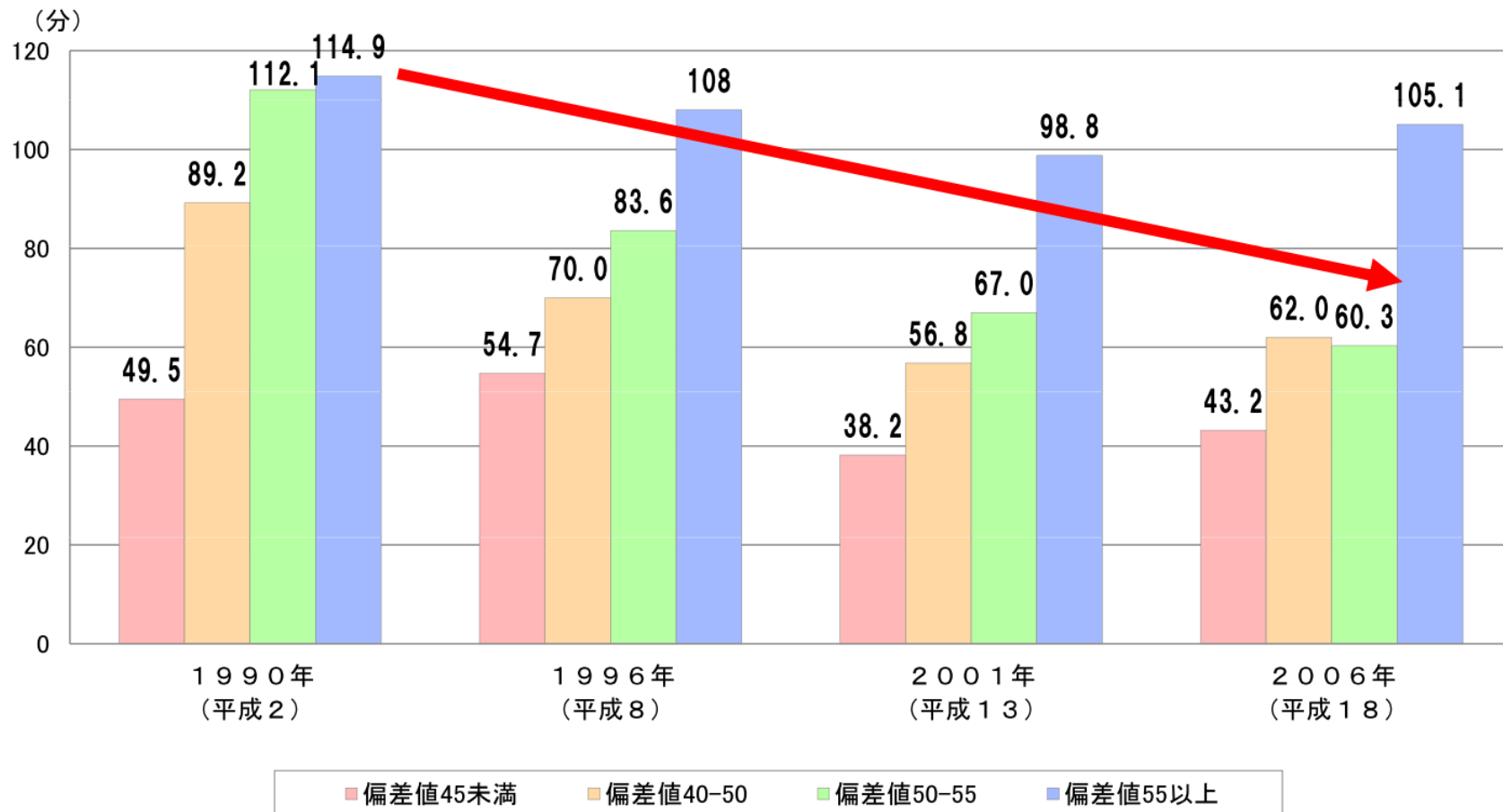
◆総合的な学習の時間における探究活動を実施した学校ほど、教科の平均正答率が高い傾向が見られる。

総合的な学習の時間において、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしましたか【学校質問紙】



高校生の学校外における平日の学習時間の推移

○ ボリュームゾーンである中間層の勉強時間が大きく減少している。



(注) 学習時間には、学習塾や予備校、家庭教師との学習時間を含む

【調査概要】 高校2年生（普通科）4,464人を対象に、全国4地域（東京・東北・四国・九州地方の都市部と郡部）で実施。
（出典）Benesse教育研究開発センター「第4回学習基本調査」

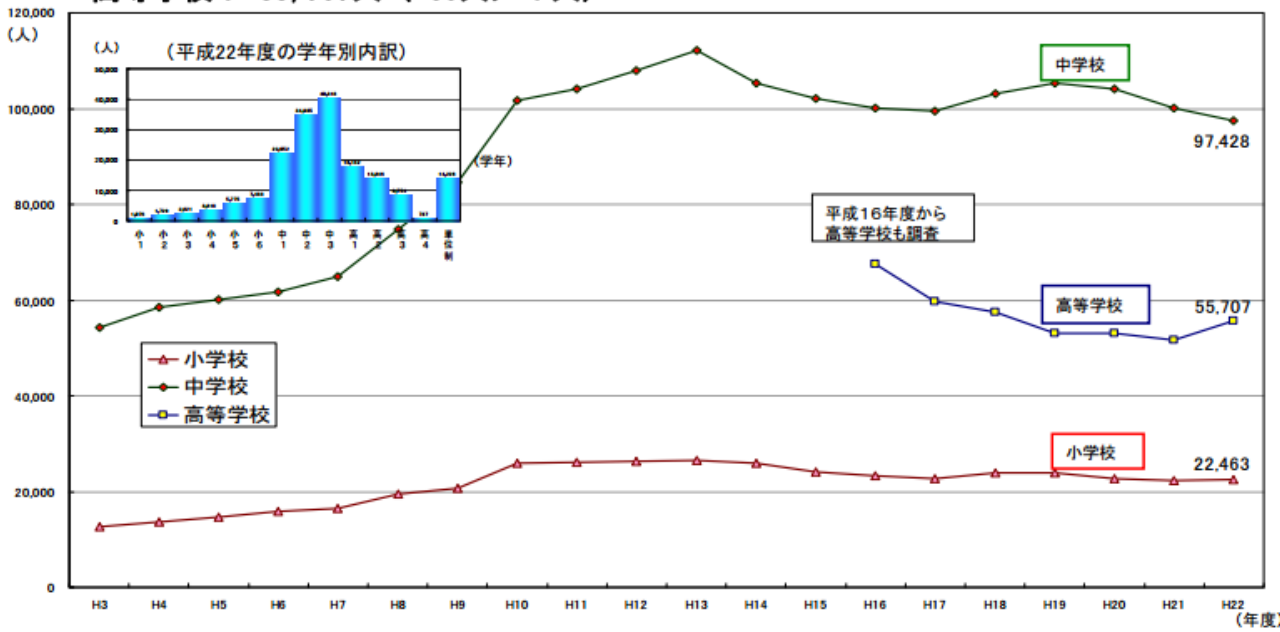
小中高校 不登校 児童生徒数 の推移

平成22年度：168,055人(前年度174,160人)

小学校： 22,463人 (311人に1人)

中学校： 97,428人 (37人に1人)

高等学校： 55,707人 (60人に1人)



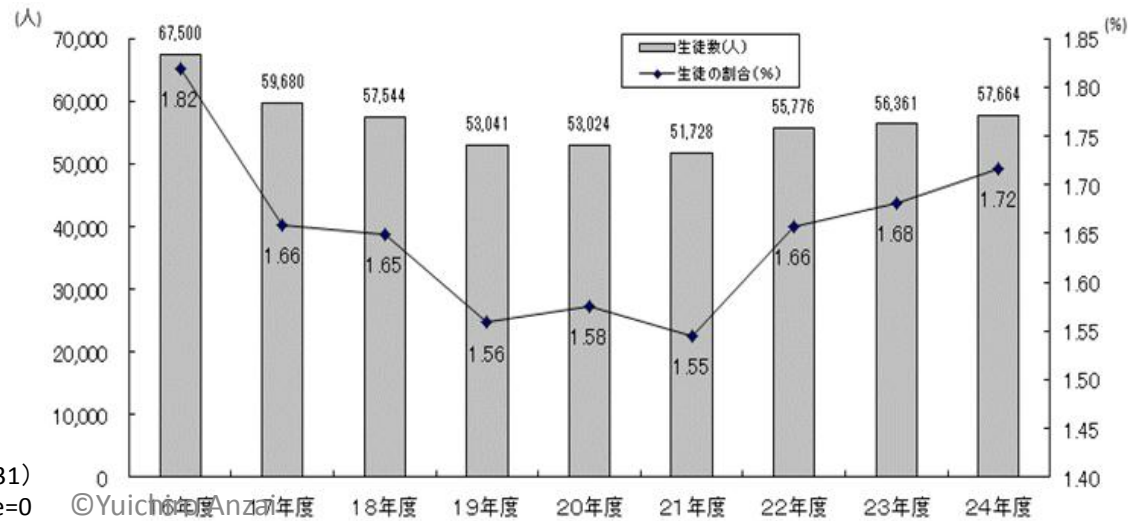
(注) 不登校の定義は、年間30日以上欠席した児童生徒のうち、病気や経済的な理由を除き、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者」

文部科学省「平成22年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」結果

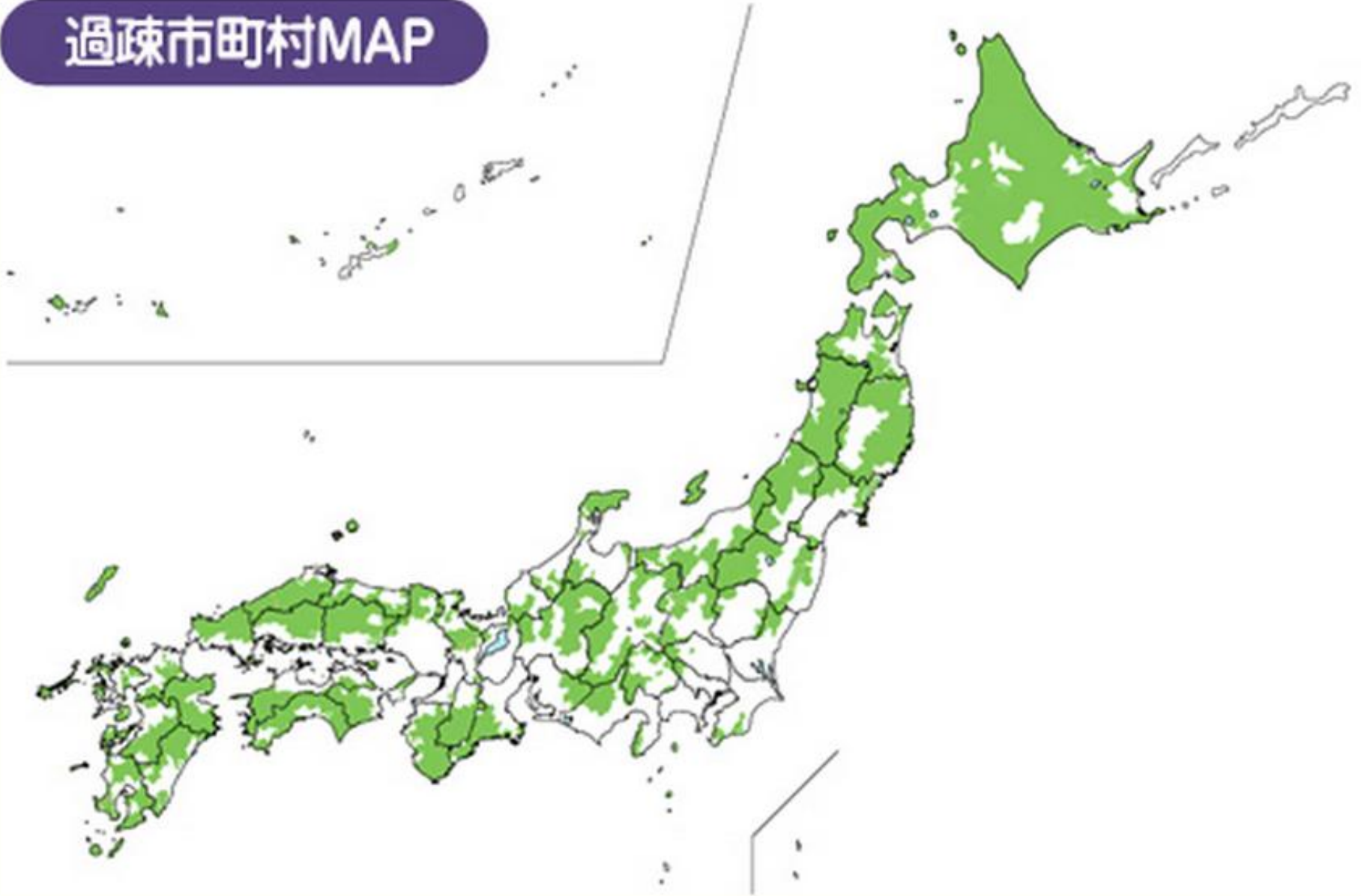
高等学校不登校生徒数の推移

(総務省統計局2014.3.31)

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001052837&cycode=0>

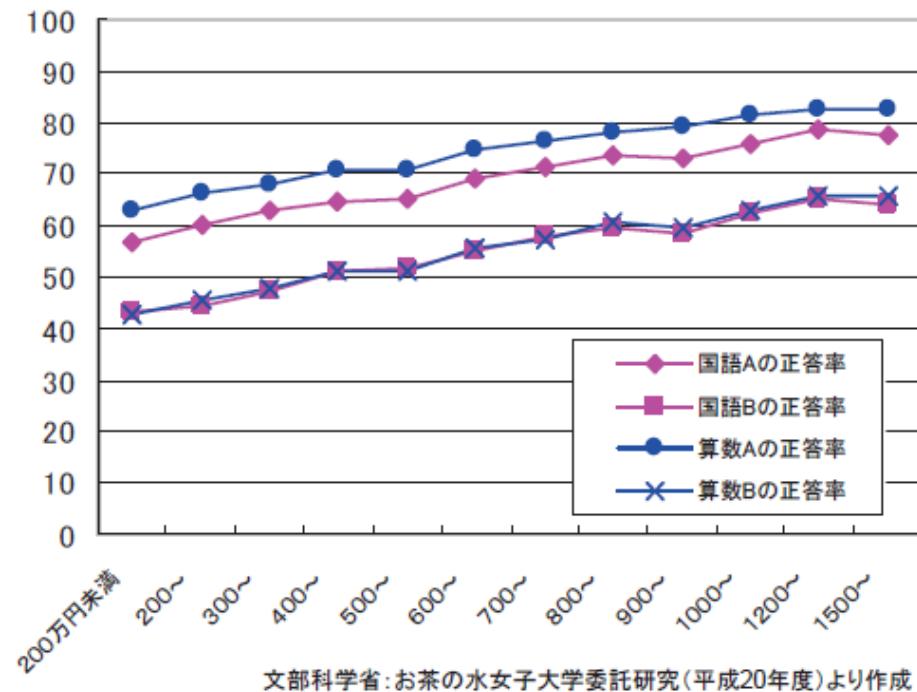


過疎市町村MAP



世帯収入・テスト正答率・進路

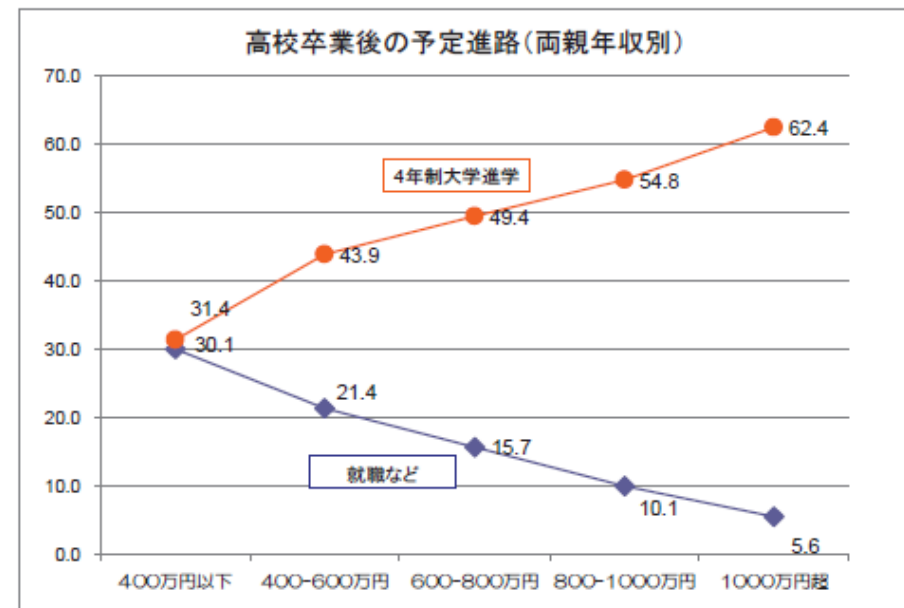
児童の正答率と家庭の世帯年収



調査対象: 公立学校第6学年の児童の保護者

調査対象校: 5政令都市の100校(児童数21名以上の公立小学校を無作為に20校(1市あたり)抽出)

◆高校卒業後の進路(両親年収別)

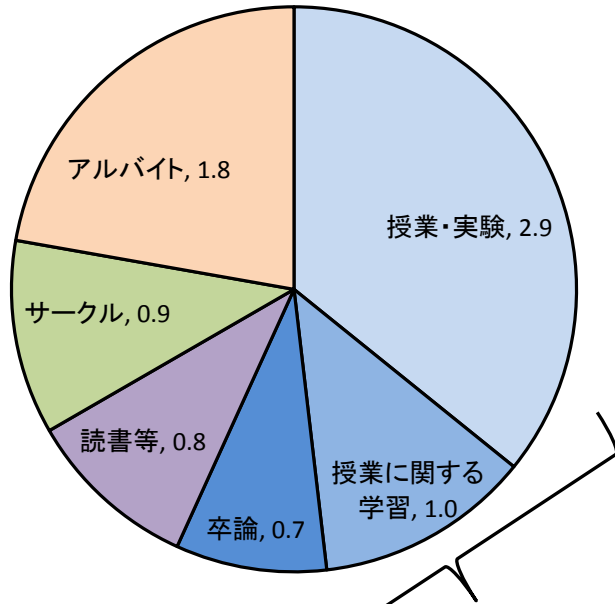


出典: 東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター
「高校生の進路追跡調査 第1次報告書」(2007年9月)

学生の学修時間の現状

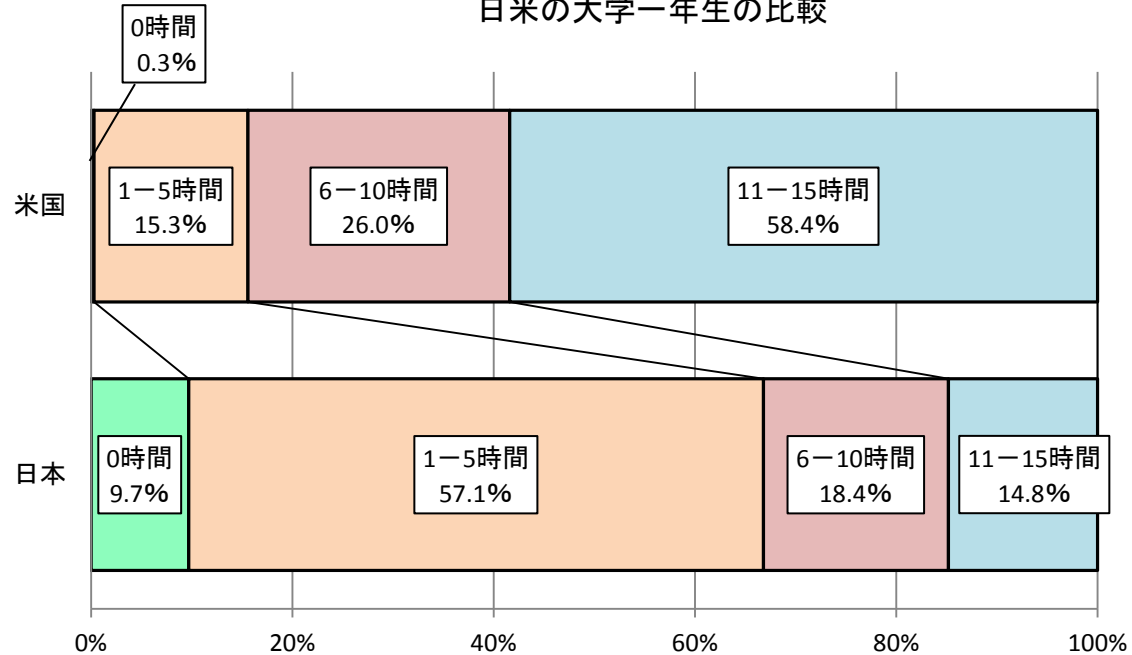
我が国の学生の学修時間(授業、授業関連の学修、卒論)はその約半日の一日4.6時間とのデータもある。

学生の活動時間の分布(計8.2時間)



授業、授業関連の学修、卒論
4.6時間

授業に関する学修の時間(1週間あたり)
日米の大学一年生の比較



出典 : 東京大学 大学経営政策研究センター (CRUMP) 『全国大学生調査』2006-8年、サンプル数44,905人 <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/NSSE> (The National Survey of Student Engagement)

社会改革としての「教育の転換」

課題: 「主体性をもって多様な人々と協力して学び、働く力」を得るための教育の機会を日本で学ぶ子どもたちすべてが持てるようにするにはどうすればよいか？

展望: 2020年までに「高大接続システム改革」を形に。

- ① 何がどう変わるのか？
- ② 幼小中学校段階の変化
- ③ 高校教育改革、学習指導要領の抜本的改訂
- ④ 職業教育改革
- ⑤ 大学教育改革・個別大学の入試改革
- ⑥ 企業等の採用・処遇
- ⑦ 高大接続システム改革

学習指導要領の改訂と高大接続システム改革

I. 学習指導要領の改訂 2014.11.20

文部科学大臣諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」

II. 高大接続改革 2014.12.22

中教審答申「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～」

十分な知識・技能をもち、それを活用できる思考力・判断力・表現力を臨機応変に発揮でき、主体性をもって多様な人々と協働し、学ぶことのできる力が身につく教育の機会をすべての子どもたちに。

I. 学習指導要領の改訂

1. 教育目標・内容と学習・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えた、新しい時代にふさわしい学習指導要領等の考え方。

2. 育成すべき資質・能力を踏まえた、新たな教科・科目等の在り方、既存の教科・科目等の目標・内容の見直し。

外国語、

社会生活を営むために必要な力を実践的に身に付けるための新たな科目、
地理歴史科の見直し、

高度な思考力・判断力・表現力等を育成するための新たな教科・科目、
「総合的な学習の時間」の改善、

職業教育の充実、

義務教育段階での学習内容の確実な定着を図るための教科・科目、
幼児教育と小学校教育のより円滑な接続、

インクルーシブ教育、体育・健康に関する指導、

教科等を横断した幅広い視点、学年間や学校種間の教育課程の接続の改善

3. 学習指導要領等の理念実現のための、各学校におけるカリキュラム・マネジメント、学習・指導方法、評価方法の改善。

カリキュラム・マネジメントの開発、普及、

アクティブ・ラーニング及びそれに対応した教材や評価手法の開発、普及

II. 高大接続システム改革

- ① 高等学校教育改革: 受け身の学習から能動的学習への転換
次期学習指導要領に学習方法・学習評価の記述を導入。
- ② 高等学校基礎学力テスト(仮称)の導入: 高校における知識・
技能、思考力・判断力・表現力を確保するとともに、個別の学
習改善。
- ③ 大学教育改革: ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、
アドミッション・ポリシーの一体的改革 受け身の教育から能動
的学修への転換。
- ④ 個別大学における多角的評価による入学者選抜: 受検者の活
動経歴評価方法の改善、高校調査書の改革、面接・集団討論
方法の改善、小論文等の評価方法の改善、大学入学希望者
学力評価テスト(仮称)の導入。
- ⑤ 大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の導入: 個別大学の
入学者選抜における多角的評価に資するよう、十分な知識・
技能、十分な思考力・判断力・表現力などを評価する。

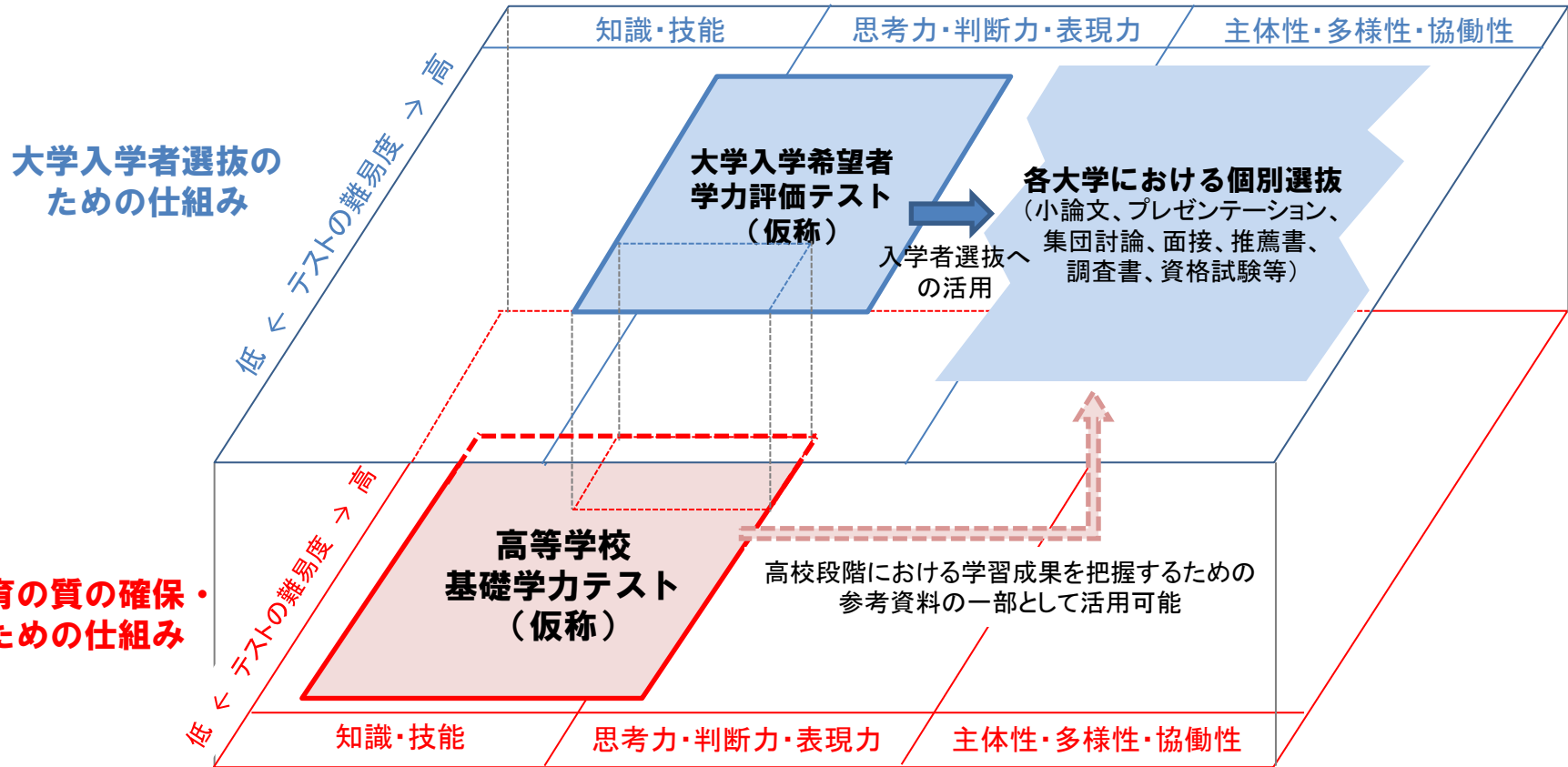
高大接続改革実行プラン(1)【数字は平成・年度】

- ・中教審初等中等教育分科会教育課程部会に「教育課程 企画特別部会」を設置し、次期学習指導要領の策定等に向けて審議(すでに設置—28答申、29告示、30周知等、31-33 教科書作成等、34より年次進行で実施予定)。
- ・多様な学習活動・学習成果の評価(28に調査書および指導要領を改訂)。
- ・課題発見・解決に向けた主体的・協働的学びの推進と高校教員の資質能力向上(速やかに実施)。
- ・高校基礎学力テスト(仮称)実施(31より実施予定)。
- ・高校基礎学力テスト(仮称)プリテスト(29より実施予定)。
- ・大学教育の質的転換(27を目途に制度改正)。
- ・大学生の学修成果の把握・評価の推進(27を目途に制度改正)。
- ・大学への編入学等の推進(27を目途に制度改正)。
- ・大学入学者選抜実施要項の見直し(27以降漸次実施)。

高大接続改革実行プラン(2)

- ・個別大学の多角的評価による入学者選抜への改革推進のための法令改正([27を目途](#))。
- ・個別大学のアドミッション・ポリシーの明確化([27にガイドライン](#))。
- ・個別大学の入学者選抜改革推進のための財政措置([27を目途に取りまとめ](#))。
- ・大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の実施([32より実施予定](#))。
- ・大学入学希望者学力評価テストのプリテスト([29より実施予定](#))。
- ・次期学習指導要領策定とも連動して、高校教育の転換、大学教育の転換、個別大学の多角的評価による入学者選抜、高校調査書の転換、2つの新テストの実施等の具体案や対応方法を策定する専門家会議を設置し、一体的検討(文科省初等中等教育局・高等教育局・生涯学習政策局共同主管の[「高大接続システム改革会議」](#)をすでに設置)。
- ・新テストの実施主体の設立([29を目途](#))。
- ・文科省内に3局主管の「高大接続システム改革プロジェクトチーム」を設置し、改革を推進([すでに設置](#))

知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体性・多様性・協働性
高等学校基礎学力テスト(仮称)、
個別大学の多角的評価による入学者選抜、
大学入学希望者学力評価テスト(仮称)



高校教育の質の確保・
向上のための仕組み

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた
高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について
～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために
中教審答申(2014.12.22)

「学力」とは何か

小学校・中学校

- ・生きる力 = 豊かな人間性 健康・体力 確かな学力
- ・(確かな)学力 = 基礎的な知識および技能 これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力 主体的に学習に取り組む態度

高等学校

- ・生きる力 = 豊かな人間性 健康・体力 確かな学力
- ・(確かな)学力 = 基礎的な知識および技能 これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力 主体性を持って多様な人々と協力して学び、働く態度

大学

- ・(確かな)学力 = (大学の水準での)基礎的な知識および技能 これらを活用して課題を解決するために必要な(大学の水準での)思考力・判断力・表現力等の能力 (大学の水準で)主体性を持って多様な人々と協力して学び、働く態度

高等学校基礎学力テスト(仮称)の検討状況(1)

(高大接続システム改革会議2015.6.18資料より)

- **目的**: 生徒自ら学習達成度を客観的に把握し、自らの学力を対外的に提示することを通して、学習意欲の喚起、学習改善を図る。
- **対象者**: 生徒個人の希望に基く参加を基本、学校単位の参加も可能。平均的学力層、学力面で課題のある層を主な対象、多くの参加を促すため、問題内容、実施時期・方法の工夫、作問等での高校教員の参画を検討。
- **対象教科・科目(H31-34)**: 国語、数学、英語で実施(選択受検可)、範囲は国語総合、数学I、コミュニケーション英語Iを上限。義務教育段階の内容も一部含む。
- **問題の内容(H31-34)**: 平均的学力層、底上げが必要な学力面で課題のある層の意欲を高めることを念頭。知識・技能中心としつつ、思考力・判断力・表現力等を問う問題も一部出題。
- **出題・解答・結果提供方式(H31-34)**: 試行を通して、CBT-IRT導入を検討(紙による実施も念頭)。正誤式・多肢選択式中心、多様な解答方式の導入を目指す。学習目標を設けやすく、成果が実感しやすくなるよう10段階以上の多段階で結果提供。
- **実施方法(H31-34)**: CBT-IRTが円滑に導入された場合、実施時期・回数制限なしで運用が可能。当初は夏秋基本に高2,3年で生徒個人の希望で年2回受検可能に。受検料は1回あたり数千円程度の低廉価格に設定を検討、低所得世帯への支援策も検討。

高等学校基礎学力テスト(仮称)の検討状況(2)

(高大接続システム改革会議2015.6.18資料より)

- **活用の在り方**: 「目的」を前提としつつ、生徒の学習改善の観点から、高校での指導改善や国・都道府県等の教育施策の改善にも活用。学習意欲の低下が顕著な状態にある一定の推薦・AO入試の受検者層を特に念頭に置きつつ、進学時等において生徒が基礎学力を把握・提示するため、又は大学等が基礎学力を把握するための方法として用いることも想定。(大学入学者選抜の場合には原則として2年次の結果は活用しない方向で検討。企業等に対しテストの結果をもって生徒の可能性が狭められることのないよう一定の配慮を求める。
- **民間の知見の活用**: 英語は、基礎的学習到達度のきめ細かい評価、実施場所、費用負担、継続性・安定性に留意しつつ、4技能試験の実施に向け、民間の資格・検定試験も積極的に活用する観点から、民間との連携の在り方について検討。
- **H35～** 高校生の基礎的な学習到達度を把握する観点から、次期学習指導要領において示される必修科目を基本として実施。

大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の検討状況(1)

(高大接続システム改革会議2015.6.18資料より)

- **目的・対象者**： 大学入学希望者が大学教育を受けるために必要な能力を把握することを主な目的とし、十分な知識・技能の修得を前提に、「知識・技能を活用して、自ら問題を発見し、その解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」を中心に評価。

特に重視して評価すべき「思考力・判断力・表現力等」の明確化とそれを踏まえた作問 ①より具体的な能力内容を整理、②各教科科目ごとに現状の課題も踏まえつつ今後特に重視して評価すべき力を明確化、③これらをよりよく評価できる作問を具体化。

大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の検討状況(2)

(高大接続システム改革会議2015.6.18資料より)

- 対象教科・科目(H36～):
 - 地歴・公民については、次期学習指導要領における科目設定等に関する検討にも留意しながら、単なる暗記ではなく、例えば、歴史系科目において歴史的思考力等を重視する方向で強化。
 - 次期学習指導要領で導入が検討されている科目のうち「数学と理科の知識や技能を総合的に活用して主体的な探究を行う新たな選択科目」に対応する科目の実施を検討。
 - 数学、理科については、知識・技能に関する判定機能に加え、特に重視して評価すべき思考力・判断力・表現力等に関する判定機能を強化。
 - 国語については、知識・技能に関する判定機能に加え、特に重視して評価すべき思考力・判断力・表現力等に関する判定機能を強化するとともに、次期学習指導要領における科目設定等に関する検討にも留意しながら、例えば、様々な分野の論理的な文章を読んだり書いたりする力などを特に重視して評価することについても検討。
 - 英語については、ライティングやスピーキングを含む4技能の評価を重視。
 - 次期学習指導要領における教科「情報」に関する検討を踏まえ、対応する科目の実施を検討。

大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の検討状況(3)

(高大接続システム改革会議2015.6.18資料より)

- **問題の内容、出題・解答、成績提供方式(H36～)**:
 - 多肢選択式の出題に加え、記述式や「選択式でより深い思考力等を問う問題」などの充実を目指す(採点体制の整備、採点期間の延長等を踏まえた検討が必要)。
 - 選抜性の高い大学が入学者選抜の一部として十分活用できるような高難度の出題も含む。
 - CBT-IRTの導入を目指す。(安定性、セキュリティ、コスト等を含めた信頼性の確保を十分考慮)
 - 大学・大学入学希望者に対し、多段階で結果を提供することと併せ、例えばパーセンタイル値などによる具体的なデータを大学に提供することを目指す。
- **実施方法(H36～)**: CBT-IRTの導入を前提に年複数回実施の仕組みを目指し、高校教育への影響や大学等の負担も踏まえつつ、適切な実施方法を検討。受験料は1回あたりの検定料が適切な価格となるよう設定。
- **民間の知見の活用(H36～)**: 英語は、入学者選抜としての妥当性や信頼性、試験実施体制、費用負担や受験機会の確保、継続性・安定性に留意しつつ、4技能試験の実施に向けて、民間との連携の在り方を検討。
- **活用の在り方(H36～)**: 各大学の特色等を踏まえたアドミッション・ポリシーに基づき、各大学において活用。

大学入学希望者学力評価テスト(仮称)の検討状況(4)

(高大接続システム改革会議2015.6.18資料より)

- **対象教科・科目(H32-35):**
 - 次期学習指導要領の議論の方向性を勘案しつつ、特に重視して評価すべき思考力・判断力・表現力をよりよく評価。
 - 地歴・公民は、単なる暗記だけでなく、例えば、歴史系科目において歴史的思考力等を重視。
 - 数学、理科は、知識・技能に関する判定機能に加え、思考力・判断力・表現力に関する判定機能を重視。
 - 国語は、知識・技能に関する判定機能に加え、例えば、言語を用いて論理的に思考する力などの思考力・判断力・表現力等に関する判定機能を重視。
 - 英語は、ライティングやスピーキングを含む4技能を重視して評価する方向で検討。
 - 試験の科目数は、大学入試センター試験より簡素化。
- **問題の内容、出題・解答、成績提供方式(H32-35):**
 - 多肢選択式の出題に加え、短文記述式や「選択式でより深い思考力等を問う問題」などの導入を目指す(採点体制整備、採点期間延長等を踏まえた検討必要)。
 - 多肢選択式の問題についても、例えば、各教科・科目の特性を踏まえ、問題文を長文化する、複数の回答のある問題を出題する、他の教科・科目や社会との関わりを意識した内容を取り入れるなどの改善を検討する。
 - 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の検討状況等を踏まえつつ、CBT-IRTの具体的な導入方法や導入時期等を検討。
- **実施方法(H32-35):** CBT-IRTの導入の検討状況や、高校教育への影響や大学等の負担も踏まえつつ、適切な実施方法を検討。

3度の教育転換期(明治、戦後、現在)

A) それぞれの特徴

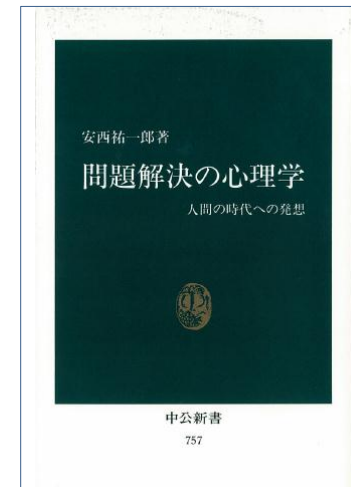
- **明治** 漢学から洋学へ、小中学校の急速な整備、国民皆教育
- **戦後** 米国的教育の導入、高校大学の全国的整備、理工系修士課程の整備
- **～2000** 18歳人口の急減、高卒就職者数の急減、(中)高大の詳細な序列化
- **現在** グローバル化・多極化、教育の国際競争、子どもの貧困率の上昇

B) 共通性:

- 質的転換と量的転換の同時進行
- 地域の違い・所得の影響の克服
- 世界潮流への合流
- 新しい教育方法・教育評価の導入
- 「主体性の涵養」・「新しい社会への適応」・「新しい知識と新しい知識獲得方法の獲得」

主体性・多様性・協働性(1)

1. 主体性とは、自分の目標を自分で見だし、実践する力
(≠一人よがりの主張パワー、≠人の意見をきかないパワー)
2. 自分の目標をもっている人の心は、その目標が達成されやすいように働く。(拙著『問題解決の心理学』中公新書,1985)
3. 主体性は、人の心を感じる力、多様な人々と協働する力をもたらす。
4. 主体性は、多様な人々と情報を共有する力をもたらす。
5. 主体性は、想像力、臨機応変力、並行処理力、人間としての一貫性をもたらす。
6. 主体性は、学び続ける力、内省する力、創造的に思考し実践する力をもたらす。
7. 主体性は、答えのない問題に答えを見出す力をもたらす。
8. 主体性は、チーム力をもたらす。



主体性・多様性・協働性(2)

- **問題解決力**: 答えのない茫漠とした状況(未知の他者との遭遇を含む)を「問題」として理解し、答えを見つけ出す力
(答えがある問題(従来のマークシート記入方式のペーパーテストの問題等)を解く力ではない。)
- **チーム力**: 多様な他者とのチームの形成、共通目標の生成、未知の他者の心を感じるコミュニケーション、知識・技能の活用、チームへの貢献
(仲良し同士だけが集まって与えられた問題を解く力ではない。)
- **臨機応変力**: 答えのない茫漠とした状況(未知の他者との遭遇を含む)で迅速に的確な判断をし、行動する力
(適当にあっちを向いたりこっちを向いたりする力ではない。)

主体性とPBL(Problem-Based Learning)

PBLによって主体性は身につくか？

- (a) PBLの訳は「課題解決型学習」ではない。
- (b) PBLは課題解決型学習ではない。
- (c) PBLは教育のためのテクニックではない。
- (d) PBLでは教え込まないこと、教育者だけで閉じないことが重要。
- (e) 仲よし同士のグループ学習はPBLではない。
- (f) ICTは主体性の涵養に役立つ。

- 「PBL」、「AL」、「インターシップ」と呼ばれている活動は本当に有効に機能しているのか？
- 主体性を身につけるためのカリキュラムは本当にあり得るか？
- 主体的に学ぼうとする学生・生徒・児童に合ったカリキュラムが用意されているか？

思考力・判断力・表現力

- ① **言語に関する能力**: 読解力、要約力、文脈に応じて適切に表現する力、コミュニケーション力、その他。
- ② **数に関する能力**: 統計的思考力、論理的思考力、図やグラフを描き・読む力、その他。
- ③ **科学に関する能力**: モデルをつくって説明する力、計画を立てる力、抽象化する力、大ざっぱに推測する力、その他。
- ④ **社会に関する能力**: 合理的思考力、歴史や社会の複雑な現象から問題を端的に把握する力・議論を焦点化する力、矛盾点を露わにする力、その他。
- ⑤ **問題発見・解決力**: 答えのない問題に答えを見出す力、問題の構造を定義する力、文脈に応じて問題解決の道筋を定める力、その他。
- ⑥ **情報活用能力**: 情報を収集する力、情報を整理する力、情報を的確に表現し、伝達する力、その他。
- ⑦ その他

知識・技能

1. 知識・技能:

自ら記憶した情報

自ら意味づけし、関連づけした情報

自ら活用できる情報

他者と共通した情報

ただし

知識: 事物・できごと・性質やそれらの関係についての情報

技能: 行動・活動やそれらの関係についての情報

2. 知識・技能の活用力: 知識・技能を、文脈に応じて応用する技能

情報を抽出する・組み合わせる・抽象化する・吟味する・大事な情報を選ぶ・適切な表現の方法を創る・別の方法を工夫する・別の観点からみる・別の文脈でとらえる・その他多数

主体性を支える心の機能

- 感情・社会性
 - インタラクション・コミュニケーション
 - 知覚・運動
 - 記憶・思考
 - 概念・言語
 - 知識・技能
-
- 経験
 - 判断(事実判断と価値判断)
 - 目標・意味感性・知識の構造化可能性
 - 目標の発見
 - どうすれば「目標を発見」できるか？



2015年度までに
約60企業、約20大学参加
大学1年春学期を中心に延
べ6000人余受講。

⇒FSP研究会

2014年シンポジウム
未来を創る「主体的な学び」を実践する
～Future Skills Project研究会4年間の挑戦～

次回：産学協同就業力育成シンポジウム2015
2015.12.25 明治大学アカデミーホール(予定)

一般社団法人フューチャースキルズプロジェクト研究会

©Yuichiro Anzai
<http://www.benesse.co.jp/univ/fsp/>

FSP研究会4年間の実践による「発見」

1. 「学びの原動力」は「主体性」。
2. 「(真に)答えのない問題」に対し、初めて会った人たちとのチームワークで答えを見出そうと努力するトレーニングを何度も繰り返す。
3. (大学)1年生の春学期が最適。
4. 「単位」を取れる授業として実践することが重要。
5. 講師の側が「教え過ぎない」、「我慢する」。
6. 企業業種・規模・地域、大学設置形態・分野・規模・地域等によらず可能。
7. 教える側の異質な関係者同士の緊密な信頼関係、目標の共有、風通しの良いコミュニケーションが必要。